

## 新学部長に聞く

01年、ネットワーク情報学部スタートに伴い商学部から移籍。商学部では情報教育の導入と発展の中枢として活躍、1997年から2003年にかけては、情報科学センター長として、全学の情報教育環境の整備・発展を担ってきた中村教授に学部のあり方を伺った。



### 「自信」につながる小さな成功体験を

中村友保ネットワーク情報学部長

「IT(情報技術)」という分野が注目され、一般家庭に入りこむようになって、ようやく15年ほどです。ネットワーク情報学部は急速に進む「情報社会」にいかにかッチアップしていくか、社会のニーズにあった実力を身につけた学生をいかに育てて送り出すかを考えながらカリキュラム改革、コース編成などを行ってきました。1年次はすべて必修、提出課題も多いハードなカリキュラムですが、当初の目標通りの意欲ある学生が集まってきてくれていると思います。



学んだ「情報」を将来に生かすためには、それだけを学ばばいいというものではありません。例えば、将来はコンテンツ関連の仕事に就きたいからといって、それだけを学ぶのではなく、マーケティングやマネジメントなど先を見据えた幅広い学びが必要です。時代にマッチした仕事をするための「基礎能力」、「論理的思考力」そして「応用力」を身につけてもらうため、企業出身者や、デザイン界出身者など多様な分野からの教員が学部を支えています。

低学年次からの演習科目で行うグループワーク、そして学部の看板科目「プロジェクト」で、「小さな成功体験」を積み重ね、「自信」を持つようになった学生は、さらに学びへの意欲が出てきます。そういった活躍の場をいま以上に提供するため、さまざまな教育設備の充実を図りたいと考えています。

私の担当するプロジェクトでは、学生が「専修大学ブランド」について取り組んでいるのですが、私の想像を超えるアイデアが出てきています。「大学をよくしたい」という学生の思いを受け止める仕組みをつくりたい。学生生活に満足し、自信を持って卒業していく学生が増えることが、大学の発展につながります。

ITを活用した学生と教員のコミュニケーションで、きめ細やかな教育を実践し、どんな状況にも対応できる「チカラ」をつけて送り出します。



子供のころは「鉄腕アトム」に夢中になり、SFの世界に引き込まれた。読書が趣味。特に「ハリー・ポッター」シリーズの大ファン。原書で読むことで、より想像力がふくらむという。

東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。1979年本学専任講師、81年助教授、87年教授。専門分野は商学(情報商品)、情報学(情報コンテンツ概論)。東京都出身。61歳。

任期満了に伴う法学部長、商学部長、ネットワーク情報学部長の改選が、各学部教授会で行われた。

木幡文徳法学部長と川村晃正商学部長は再任され、ネットワーク情報学部長には、中村友保教授が新たに選任された。

任期はいずれも本年9月1日から2年間。



川村商学部長

木幡法学部長



## 創立130年記念事業

### 専修大学からの「知」の発信 熊本・徳島で文化講演会

#### 熊本会場

7月28日、「アークホテル熊本」での講演会には約150人が出席した(主催=専修大学、後援=専修大学玉名高校、校友会熊本支部、校友会九州連合、育友会熊本支部)。

まず日高義博理事長・学長(写真・上)が「欧米文化と武士道—法学者の視点から」を講演。最近の犯罪現象について触れ、価値体系が崩れ倫理観が迷走していると指摘。日本は明治維新後、諸外国の制度を積極的に導入したが、個人の価値観を急激に転換することはせず、また諸制度を動かした人々の根底には道徳体系としての「武士道」が生きており、本学の創立者たちも「サムライ精神」をもって高等教育に取り組んだと語った。新渡戸稲造についての新しい資料を示しながら、先人たちが欧米文化を日本に導入する際に、価値観や価値体系の変容をどう考えていたかを探り、混迷する現在、どう対応するべきかを考察した。

「古代国家形成と『留学生』」がテーマの矢野建一文学部長(写真・下)は、米国への留学経験者により創立され、間もなく創立130年を迎える本学には、創立者たちの国家形成にかける魁(さきがけ)としての気概が、「国際交流」という形で教育現場に継承されていると語り、本学が発見と公開に大きな役割を果たした、遣唐留学生「井真成」の墓誌を紹介。時空を越えて国家形成に貢献した留学生の群像を探った。



(写真提供:熊本日日新聞社)

#### 蜂須賀家旧蔵本を徳島城博物館で特別展示

#### 徳島会場

阿波・淡路25万7千石の大名「蜂須賀家」は、「阿波国文庫」に代表されるように、文化に傾倒した藩主を輩出したと推測され、美術品の収集にも力を注いだといわれる。本学図書館所蔵の、重要文化財・藤原為世筆「長秋詠藻」(1296年写)をはじめとする21種、129冊に及ぶ蜂須賀家旧蔵の古典籍が、徳島市立徳島城博物館の開館15周年記念特別展「蜂須賀家の名宝と大名美術の世界」(7/20~8/26)に展示されたのを機に8月5日、「ウェルシティ徳島」で講演会を開催し、約200人が出席した(主催=本学、徳島新聞社、後援=校友会徳島支部、育友会徳島支部、徳島市、徳島市教育委員会)。



▲特別展の目録

大庭健図書館長のあいさつに続き、日高理事長・学長が、「大学改革と大学のあるべき姿—社会知性の開発を目指して」と題し、全入時代に突入し、さらに大学進学率が50%を超える段階に入ったいま、大学のあるべき姿を見据えた大学改革と、本学が目指す教育ビジョン「社会知性の開発」の意義を明らかにした。

続いて、日本中世文学が専門の石黒吉次郎文学部教授が「蜂須賀家旧蔵の貴重本(専修大学図書館蔵)をめぐる

て」を講演。本学が所蔵する蜂須賀家旧蔵本は、和歌と物語の2分野からなり、古典の中でも人気のある代表的な作品が多く、また著名人の筆になるものが多い。「長秋詠藻」、「源氏系図」(源氏物語古系図)、「和歌題林抄」を題材に、文学資料としての価値や位置づけを解説し、近世大名家における文化について考察した。

最後に、今回の展示を企画した徳島市立徳島城博物館の須藤茂樹学芸員が「蜂須賀家の美術品収集」と題し、蜂須賀家伝来美術品の特徴を解説し、大名家が美術品を収集した意義や、収集研究の視点について述べた。



▲蜂須賀家の美術品などを開設する須藤学芸員



石黒吉次郎教授



大庭健図書館長



日高理事長・学長

(写真提供:徳島新聞社)

## 《専修人の新しい本》

### 欧州サードセクター 歴史・理論・政策

内山哲朗 他 訳

本書『欧州サードセクター』は、グローバル時代の社会経済システム再編におけるサードセクターの位置と役割を歴史・理論・政策の三つの側面から明らかにした共同研究の成果である。



協同組合・非営利組織等々「営利を目的としない」サードセクター諸組織によって形成される社会経済領域の重要性については、わが国では必ずしも十分に理解されているわけではない。

しかし成熟化社会において、政府や市場だけではなく「市民の役割」が重要になるとすれば、欧州の経験は日本にも大きな示唆を与えてくれる。わが国の社会と経済の行く末を考えるためにこそ読まれてしかるべき一書である(日本経済評論社・本体4600円＋税)。

訳者代表(うちやま・てつろう)＝経済学部教授。社会運動論担当。

《訃報》

橋元 雅司氏(はしもと・まさし)専修大学理事・評議員、専修大学松戸高校理事長

8月13日、すい臓がんで死去。77歳。告別式は近親者のみで執り行われた。元国鉄副総裁。国鉄退職後、1987年から99年にJR貨物の社長、会長を務めた。99年専修大学評議員、2000年同理事。本年4月から専修大学松戸高校理事長。